

# 若年層の投票を促すには

根元ゼミ

経済学部経済学科 4年

豊生 歩夢

## <要旨>

近年投票率の低下が問題視されているが、なぜこのような現状が生じてしまっているのか。その理由の一つとして「政治的有効性感覚の喪失」が挙げられる。具体的には、一票の重みの相対的な低下や、自身が投票しても政府は何もしてくれないだろうと感じてしまうことなどだ。こういった理由から政治に無関心になり投票率は下がってしまう。

また投票者が高齢者層に偏っているという事も問題視されている。現在最も投票率の高い年代は60代であり、2014年の衆議院議員選挙では68.3%である一方、最も低い年代は20代であり、同選挙では32.6%となっている。この差は約35%であり実数にして約300万人もの開きがある。

こういった事情から、政治家は当面の選挙に勝つために社会保障の拡充を謳う政策を公約に掲げるのである。このようないわゆるシルバー民主主義は社会保障費などを際限なく膨張させる恐れがあり、財政問題を引き起こしてしまう。

これらのような問題を解決するためには、投票者の偏った年代層というものを是正する必要がある。そのためには若年層に投票を促す仕組みが求められる。特に近年広がりを見せつつある「センキョ割り」という取り組みは、若年層を中心に、投票する事のメリットを付与することができ、是正に効果があると考えられる。

実際に、「CSES」から参議院議員選挙のデータを直近三年度分用いた重回帰分析の結果によると、「前回投票したか」という項目が有意という結果が得られたため、「センキョ割り」によって足を運んでもらい投票することは、次回の選挙の投票を促す効果が期待できると言えるだろう。